

母のマツサージ

一

「ただいま」

玄関のドアを開けると、柔らかな照明と、どこか甘いオイルの香りが悠真を出迎えた。

「おかえり、悠真。今日は少し遅かったね」

キッチンから顔を出した母——藤原絵梨は、四十二歳とは思えないほど若々しく、明るい笑顔を浮かべていた。白いタンクトップにショーツパンツというラフな格好が、彼女の健康的な肢体を自然に強調している。

長い黒髪を後ろで一つにまとめ、首筋にうつすらと汗を浮かべている姿は、頑張り屋のセラピストそのものだ。

「うん、ちよつと部活のミーティングが長引いて……」

悠真は靴を脱ぎながら、なるべく母の顔を見ないようにした。

最近、自分が恥ずかしい。母の笑顔を見るだけで、下半身が勝手に反応しそうになる自分が情けない。

「夕飯はもうできてるから、食べたらずくにシャワー浴びてきなさい。

今日は特に念入りにマッサージしてあげるから」

「え……また？」

思わず声が上ずった。

絵梨は少し首を傾げ、につこりと微笑んだ。

「だってあなた、最近疲れてるでしょ？ 遠慮しなくてもいいんだよ？」

その言葉に、悠真の胸は高鳴った。

母にとって、マッサージはただの技術ではない。息子への愛情を表現する、最も自然な手段だ。夫と死別して以来、ずっと二人で生きてきたこの家で、絵梨は、言葉より身体で伝えることを信条にしてきた。

そして悠真も、幼い頃からそのマッサージに慣れ親しんできた。

シャワーを浴び、施術室にあるベッドにうつ伏せになる。そこは、神経を癒すような、オイルの香りが漂っていた。

「さあ、脱いでリラックスして」

後ろから聞こえる母の声は、いつも通り爽やかで真面目だ。プロのセラピストとしての落ち着きと、母親としての優しさが同居している。

悠真はタオルを腰に巻いた状態でうつ伏せになり、顔を枕に埋めた。心臓の音がうるさい。

絵梨がオイルを手に取り、温めながら近づいてくる気配がした。

そしてマッサージが開始された。

「肩、かなり凝ってるわね……勉強と部活の両立は大変よね。あんまり無理しないでね」

柔らかく、けれどしつかりとした指が肩甲骨のあたりに触れた瞬間、悠真は小さく息を呑んだ。

（また始まる……）

絵梨は、プロの技術を駆使して息子の体をほぐしていく。

肩から背中、腰へと流れるように手を滑らせ、時には体重をかけ、時には指先で丁寧な揉み解す。

そのたびに、悠真の体は熱を持ち、腰の奥が疼いた。

「ん？　ここ固いな……痛くない？」

「う、うん……大丈夫」

悠真の声は掠れていた。

母の吐息が首筋にかかる。

タンクトップ越しに感じる柔らかい胸の感触。

オイルでぬるぬるになった母の手が、腰のくぼみを丁寧に揉みほぐす動き。

すべてが、悠真にとっては甘い拷問だ。

特に、絵梨が太ももの裏側を揉み始めたとき、悠真は枕に顔を強く押しつけた。勃起してしまっている自分が情けなくて、惨めで、それでも

（母さんの手、最高に気持ちいい……）

十八歳の健全な肉体は、母の無自覚な刺激に正直すぎた。

絵梨はそんな息子の葛藤などつゆ知らず、ただ真剣に、そして愛情を込めて手を動かし続ける。

「悠真は私の宝物だからね。しっかりと癒してあげないと……」

柔らかい声が、耳元で優しく囁いた。

悠真は奥歯を噛みしめ、必死に声を殺した。

この甘くて優しい、残酷な時間が、これからも続いていくことを思いながら。

二

マッサージを終え、自分の部屋に戻った悠真は、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。

まだ体が熱い。母の指が触れた部分が、じんじんとした甘い疼きを残していた。

「はあ……」

深い溜息が漏れる。

天井を見つめながら、悠真は無意識に自分の太ももをさすった。母の指の感触が、まだそこに残っているような気がした。

（今日も……やばかった）

シャワーを浴びた後、マッサージが始まるまでの間はまだ大丈夫だった。しかし絵梨のオイルを塗った手が肌に触れた瞬間、悠真の体は裏切り始めた。特に母が太ももの内側を丁寧に揉みほぐしてくれたとき、下半身がみるみる反応してしまった。

それを必死で隠していたので、母は何も気づいていないはずだ。

「悠真、脚の裏側も凝ってるわね。リンパを流してあげる」

母の声はいつものように明るく、真面目だった。プロのセラピストとして、息子の健康を第一に考えてくれている。性的なことなど、これっぽっちも考えていない。

その無自覚さが、悠真には残酷だった。

ベッドの上で、目を閉じた。

すると、すぐに母の姿が浮かんでくる。白いタンクトップから覗く胸の谷間。オイルで光る手。腰を曲げたときに浮かぶヒップのライン。そして、あの温かくて力強い指――

「……っ」

悠真は、大きく目を見開いた。

下半身が、再び硬く反応している。

（またかよ……）

マッサージが終わってから、もう二時間近く経つというのに、まだ疼いている。

悠真は布団を被り、スマホを手にとった。気を紛らわせようと、いつものエロ動画配信サイトを開く。

しかし、どの女優を見ても、母の顔が重なってしまう。

母の指の動きの心地よさが、ずっと体に残っている。

「最悪だ……」

小さく呟いて、悠真はスマホを放り投げた。

母は今、いつものように、リビングでマッサージの技術書を読んでいるのかもしれない。もつと息子を気持ちよくしてあげられるようにと、熱心な研究を続けているのかもしれない。

その想像が、悠真の胸を締めつけた。

自分はなんて汚い人間なのだろう。母は純粋に愛情を注いでくれているだけに、それを性的な快楽にすり替えてしまっている。

情けない。最低だ。

それでも——悠真はゆっくりと右手を下半身に伸ばした。母の指の感触を思い出しながら、陰茎をそつと握る。

（母さん……）

頭の中に浮かぶのは、笑顔でマッサージしてくれる絵梨の姿。
あの柔らかい声。温かい手。優しい香り。

手の動きが段々と速くなる。

「は……っ、母さん……」

小さな声が漏れた。

射精した後、彼は虚脱感と強い罪悪感に包まれた。

ティッシュで汚れを拭いながら、天井をぼんやりと見つめる。

（このままじゃ……本当にまずい）

母のマッサージが、ただの愛情表現ではなくなってきた。
自分の体が、母の手に溺れ始めているように感じられた。

三

翌日の午後、教室の窓際の席で悠真はぼんやりと外を眺めていた。

黒板に書かれた英語の単語も、教師の声も、まったく頭に入っていない。ノートにペンを走らせているふりをしながら、頭の中は別のことでいっぱい。

母の指。声。柔らかい体。

(母さん……)

授業中。

ずっと母の姿が頭に浮かんでいた。

昨夜のマッサージの感触が、まだ肌に残っている。特に太ももの裏側を揉みほぐされたときの、じんわりとした快感が忘れられない。

母の息が耳にかかった瞬間、背筋を這い上がった甘い痺れ。

悠真は小さく息を吐き、机の下で脚を軽く閉じた。

また反応し始めていた。

隣の席の女子が笑い声を上げた。クラスで人気の可愛い子だ。以前なら少しドキドキしたかもしれないが、今はただ「母さんに比べると色気ねえな」という感想しか思い浮かばない。

母の笑顔の方が優しく、その声の方が心地よくて、その香りの方が

「藤原、ちゃんと集中しろよ」

授業中、先生に後ろから肩を叩かれ、悠真はハッと我に返った。

「すみません……」

悠真は唇を噛んだ。

放課後、部活のランニング中も同じだった。

汗を流し、地面を蹴るたびに、母のマッサージでほぐされた筋肉が疼く。息が上がるたび、母が「気持ちいい？」と聞いてくれた声が甦る。

シャワールームでも、母に触れられているときのことを思い出して興

奮して、慌てて冷たい水を浴びた。

家に帰る電車の中でも、母の幻は消えない。

吊り革につかまりながら、ぼんやりと窓の外を眺めていると、隣に立っていた女性の香水の匂いがした。その瞬間、母のオイルの甘い香りが脳裏に甦り、悠真は思わず目を閉じた。

（母さん……今、何してんだろう）

きつと、どこかで客をマッサージしているのだろう。

いずれにせよ、帰ったらまた、あの笑顔で迎えてくれる。

そしてきつと、

「おかえり、悠真。なんか疲れた顔してるわね。今日もマッサージしてあげようか？」

と言ってくれる。

その言葉を想像しただけで、彼の股間は熱くなる。

「……っ」

悠真は鞆で前を隠すようにしながら、必死に深呼吸した。

（俺、どうかしてる……）

母は、ただの母だ。自分を産んで育ててくれた、優しくて真面目で、どこまでも健全な存在。

それなのに、悠真の頭の中では母が性的な存在として、どんどん大きくなっていく。

母の手、胸、太もも、唇――

電車が駅に着く頃には、悠真は再び硬く勃起していた。

家までの道を歩きながら、彼は小さく呟いた。

「母さん、今日もマッサージしてくれるかな……」

胸の奥が、甘く疼いた。

四

自宅の夜、悠真は施術室のベッドにうつ伏せになり、枕に顔を埋めていた。

「今日は特に念入りにやってあげるね。あなたは、腰と鼠径部が、かなりリンパの流れが滞ってるみたいだから」

藤原絵梨はオイルを手に取りながら、プロのセラピストらしい落ち着いた声で言った。

白いタンクトップとショートパンツ姿の母が近づいてくるだけで、悠真の胸の鼓動は早くなった。

温められたオイルが、悠真の背中にゆつくりと垂らされる。とろろとした液体が脊椎に当たる感触で、すでに体が熱くなり始めていた。

「まず、僧帽筋と菱形筋の深層からほぐしていくわ。あなたは少し肩甲

骨の可動域が狭くなってるみたいだから、そこをしつかり開放しないと」

絵梨の指が肩に深く沈み込み、力強く揉み解し始めた。

親指を立てて筋肉の間を丁寧に掻き分けるように圧をかけ、円を描きながらゆつくりとリリースしていく。それはまさにプロの技術だ。

「ん……ここも凝ってる……もつと力を抜いて」

母が上半身を倒し、体重をかけながら背中全体をマッサージする。

柔らかい巨乳が、悠真の背中にむっちりと押しつけられた。タンクトップの薄い生地越しに、母の乳首の感触まで感じ取れそうなほど密着している。

「次は腰椎と腸骨の接続部ね。ここはリンパの通り道としてとても重要だから」

絵梨の両手が腰に移動し、腰骨のくぼみを親指でぐいぐいと押ししてい

く。オイルでぬるぬるになった指が、腰からお尻の境目にかけて滑り、容赦なく揉みしだく。

そして――

「鼠径リンパの流れを促すわ。ここは特に丁寧にやらないと、下半身全体のむくみにつながるの」

母は、どこまでも真面目で熱心だ。しかしその指は、悠真の内腿の付け根を、危険なほど深く刺激し始めた。親指が鼠径部を円を描くように圧迫し、ゆつくりと上下に擦り上げる。もう片方の手で太ももを鷲掴みにし、筋肉を強めに揉みながらリンパを流していく。

指先が、陰囊のすぐ横を何度も往復する。

「どう？ このあたりがだいぶあったかくなってきたでしょ？ だいぶ流れが良くなってるはずだわ」

絵梨は無自覚に、悠真の最も敏感な部分をプロの技術で執拗に刺激し

続ける。オイルでつるつると滑る指が、太ももの裏側から付け根を何度も往復し、圧迫とリリースを繰り返す。

うつ伏せの悠真の勃起した肉棒は、痛いほどに硬く、その先っぽからは先走り汁が溢れていた。

母の指があと数センチ動けば、直接性器に触れてしまう、危険な距離。「脚をもう少し開いて……そう、いい子ね。恥ずかしがらなくてもいいから、深呼吸して……そう、もつとリラックス……」

母の吐息が熱く耳にかかる。

豊満な胸が背中にべったりと張り付き、母が手を動かすたびにむにゅむにゅとした柔らかい感触を覚える。

悠真は枕を噛み、必死に喘ぎ声を抑えた。

母は、悠真の体の隅々までを、熱心にほぐし続けた。

施術が終わったとき、悠真はもう理性の限界だった。絵梨が部屋を出

た後、悠真は荒い息を吐きながら、熱々に屹立した自分のものを握り、激しく扱き始めた。頭の中はさっきの母の指と声と胸の感触でいっぱいだ。

「ああ……母さん……」

射精した瞬間、悠真は激しく腰を浮かせながら、母を熱烈に想った。罪悪感と、圧倒的な快楽。そして、母への抑えきれない想い。

この甘く淫らなマッサージは、悠真の心を深く蝕んでいた。

五

悠真は自分の部屋のベッドに横たわり、天井をぼんやりと見つめていた。

もう、堪らない。母のマッサージが終わってからもう三時間以上が経

つというのに、まだ体は熱を帯びたままだ。特に腰から太ももの付け根にかけて、母の指が頻繁に触れた部分がじんじんと甘く疼き続けている。

「母さん……」

そう呟くだけで、下半身が反応する。

今日のマッサージは、特に濃厚だった。母は、マッサージの名のもとに、悠真の性感帯を的確に、執拗に刺激し続けた。汗ばんだ太ももを密着させ、豊満な胸を背中に押し当てた。母の熱い吐息が首筋にかかるたびに、悠真の理性は溶けていった。タオルの下で、彼の肉棒は猛烈に勃起していた。

施術が終わった今も、その記憶が彼の頭を支配していた。

もう、他のことは何も考えられない。学校の授業も部活も友達も同級生の女の子も、もう、すべてどうでもいい。

母は完璧だ。優しく、温かくて、技術があつて、匂いが良くて、体

が柔らかくて――

性的な対象として、これ以上ないほど魅力的だ。

悠真はベッドの上で体を丸め、枕を強く抱きしめた。

（俺……母さんに沼っちまった……）

それがいけないことだとはわかっている。しかしもう、どうしようもない。

母のことを考えるだけで勃起する。その声を聞くだけで我慢汁が出る。そのマッサージを思い出すだけで、頭の中が真っ白になる。

これはもう、恋愛以上の感情だ。それよりも、もっと深く、暗く、ねばつくような欲望だ。

悠真は震える手で下半身に触れた。母の柔らかい指の動きを思い出しながら、激しく扱う。

「俺は……母さんのことが……」

禁忌の欲望が沸き起こる。

それでもなお、妄想の中の母は、微笑んでいる。

これほど優秀なズリネタはない。彼は激しく達した。

「母さん……」

射精後も、そう呟き続けていた。

もうどうにもならない。

母という沼に、彼は沈み始めていた。

六

その夜、いつものマッサージが終わった後も、悠真はベッドから起き上がれなかった。体は熱く、頭はぼんやりとしていた。母の指の感触が、ずっと肌の奥深くに残っている。

絵梨はいつものように優しく微笑みながら、オイルの瓶を片付けていた。

「どう？　今日はかなりしつかり流せたと思うけど……」

母が、慈愛の顔で覗き込んでくる。

その瞬間、悠真の中で、何かが決壊した。

「母さん……」

掠れた声で呼び止めた。

絵梨が振り返る。柔らかな照明の下で、母の顔が優しく輝いている。

「なに？　痛いところでもあるの？」

悠真はゆつくりと上体を起こした。タオル一枚だけの姿で、母の前に正座するように座る。心臓が破裂しそうなほど高鳴っていた。

「俺……もう限界なんだ」

「え？」

絵梨が首を傾げる。

悠真は震える声で、ようやく言葉を絞り出した。

「母さんのマッサージ……気持ちよすぎて、もう頭がおかしくなりそうなんだ」

「ん？ どういうこと？」

「毎回、母さんの指に触れられるたびに、俺……勃起してしまう」

「は？」

「母さんの胸が背中に当たる感触、太ももが俺の腰に密着する感触、鼠径部を揉まれるときの気持ちよさが……ずっと頭から離れない」

絵梨の目が大きく見開かれた。

「な、なにを言ってるの？」

「俺、ずっと母さんのことばっかり考えてる。学校でも、夢の中でも、ずっと考えてる……」

「……」

「俺、母さんが世界で一番魅力的な女性だって思ってる」

部屋に重い沈黙が落ちた。

絵梨は呆然と、悠真を見つめていた。頬がわずかに赤らみ、普段の爽やかな表情が崩れている。

「私はあなたの母親よ？」

「わかってる……わかってるよ」

「そんなこと言うなんて、おかしいじゃない……」

「わかってる、わかってんだよ。自分でも、異常だって、最低だって

……」

「……」

「でももう抑えられないんだ。母さんのことが欲しくて欲しくて、気が狂いそうなんだ……」

「そんな……」

悠真の目から、涙が一粒こぼれ落ちた。

「俺……母さんとセックスしたい」

「エッ!!」

「俺、母さんを自分のものにしたい……」

「な、なにをバカなことを……」

最後の言葉を言い終えた瞬間、悠真は深く頭を垂れた。肩が、激しい羞恥と興奮と恐怖で、小刻みに震えていた。

長い沈黙。

やがて、絵梨が小さく息を吐いた。

「悠真……」

母の声は、驚きと困惑に満ちていた。しかし、そこに嫌悪や怒りはない。

「私は正直、よくわからない。あなたがそんな気持ちを抱いていたなんて、夢にも思っていなかった……」

絵梨は悠真の肩に、そっと手を置いた。その手は、いつものように温かい。

「でも……あなたが苦しんでいるのは、よくわかる」

「……」

「私はいつだって、あなたが幸せになることだけを、一番に考えてる」
母は少し迷うように視線を落とし、それから静かに言った。

「もし私が……あなたの苦しみを和らげることができるなら……」

「……」

「考えてみるわ……」

悠真は顔を上げた。

絵梨の表情は複雑だ。驚き、戸惑い、母としての深い愛情が混じり合

っている。

「とにかく、いきなりそんなこと言われても、混乱しちゃうわよ。ちよつと、気持ちを整理しないと……」

「母さん……」

悠真の声が震えた。

絵梨は小さく微笑み、悠真の髪を、優しく撫でた。

「とにかく、今日はもう遅いから、ゆつくりお休みなさい……」

母はそう言つて、静かに部屋を出て行つた。

悠真は一人残され、激しく高鳴る胸を押さえながら、母の残した温もりを感じていた。

サンプル（試し読み）はここまでとなります！

この後、二人の関係は、急展開していきます！

禁断の母子相姦シーンを、ぜひ本編にてお楽しみください！